

昭和五十三年を迎えて

最近テクノロジー、トランスファーという問題が大きく取り上げられてきている。一つの分野の技術を他の分野に適用するというこのように、現在日本は低成長経済に既に入り、特にシステムとしての製品の考え方や、生産設備の合理化というような問題が大きくクローズアップしてきており、これにテクノロジー、トランスファーということが大きな課題となってきている。

この問題のうちでは、情報産業の技術が急速に他の分野にも必要となってきた、またこれが消化できないとその製品は没落していく運命にまで追い込まれる形になってきている。

家庭電器が最近その省エネルギーの解決方法の一つとして、また使用者の便利さのための更に一步進んだ制御方式の採用ということで、マイクロコンピュータとの組合せが大きく取り上げられている。また情報産業の基盤を受け持つ半導体の製造段階においても過去は電子計算機側の要求によるハードの製造だけで事足りたのであったが、現在LSI一個が既に電子計算機という時代となり半導体の設計にもそのソフト技術のトランスファーが非常に必要となっている。大形のプラント設備を電子計算機で制御することはもう既に早くから行なわれているが、今急速に要望されてきたのが製造工場の電子計算機制御化である。これに必要なポイントとしてその製造技術のソフトの消化という問題が取り上げられる。材料部品の自動倉庫と生産のラインと検査、更に荷造り発送の仕事まで、その操作を電子計算機に記憶させ、生産する体制が強く要望されてきており、特に日本の場合には中量・中機種を生産ラインまで考える必要がしばしば生じている。この一貫した生産ラインのソフトを消化するということが急所であり、また緊急を要する。情報産業の知識があらゆる部門にトランスファーされなければならないのが当面の課題であろう。

これまでハードの技術に偏っていた生産部門には、この技術が比較的浅く今ほどこの要望が強まってきた時代はなかったといえよう。日本の経済界において、特に製造業界にあって、この問題が当面の大きな重点となりその解決が、その企業の将来性にまで影響を及ぼすということが大きな関心を持たなくてはならない点である。

最近もう一つ感じていることに技術開発の先行性という問題がある。過去日本は外国との技術格差を自認した形で後追いの傾向がかなり多かった。今日技術水準が向上してその格差がはなはだしく縮まり、肩を並べることのできるものがかなり増してきてはいるが、先行開発をして技術の輸出を行ない対等の交流のことができることが更に望ましい。

最近工業製品の輸出に対していろいろ反撃の声があるが、その一つにかなり模倣技術の非難がなにかがある。研究あるいは技術開発の先行性ということが今ほど切実に感ずる時代はなかった。日本の技術で開発される製品を一つでも多く出し、またその技術が外国で欲しがるといのが非常に望ましい。

技術的に対等の交流ができる、またこれをしなくてはならないというのが研究開発に携わる人の大きな課題であり責任となってきた。

幸い最近日本では、エネルギー関係においても、また情報産業関係においても国として、研究所、企業などが一体となり研究開発に総力を集中する形がとられるようになってきた。これは過去の日本の姿からは大きな前進と考えられる形で多くの頭脳を集約でき、また先行性にも大きな潜在力となり得、更に開発費のむだも省くことができるということで開発の先行性という問題にとっても、大変望ましい形態といえよう。

難しい低成長経済の日本の将来における研究開発に関して私共は覚悟を新たに、昭和53年を迎えたいと思う。



日立製作所 取締役社長

吉山 博 孝